

自己との対話による作品表現・造形展開について

美術・工芸領域 小林研究室

村山文佳

1.はじめに

私達は日々の中で、様々な感情を抱えて生きている。他者との会話、自身が発した発言、時には自然が与えた状況など、一喜一憂全てを己の身一つで受け止めている。しかし、これらの感情は時間経過の中で薄らいでいくものもあれば、肥大化し腫瘍のように自身をも蝕むものだとも考えている。日常の中で何かを見聞きし思考を巡らせる中で、感情は何よりも敏感に反応を起こす。この感情とはどこから生み出されているのだろうか。私はこの感情の源となる存在を「精神」と名付け、作品という形で表現することを試みてきた。

本研究は、私が過去に経験した「東日本大震災」を主軸に、制作を通じた感情との語らいの中で生まれる自身の表現方法と、自己との対話の中で生まれる作品造形について考察を行なったものである。

2.自己を表現するということについて

本研究では制作をするうえで主軸となる自身の感情と精神について考察を行った。まず、自身が最も敏感に反応する過去の出来事を分析することで、感情とは常に身体中を巡るものであると考えた。この感情は精神をポンプに流れ続けるものであり、時に涙や呻きとなって身体から溢れだしてしまうこともある。私にとって、この溢れだす瞬間というものが作品制作であった。その事実と対面した、学部4年次卒業制作を考察することにより、感情を作品という形にすることは、認識できていない自己の内面から現在の私へ対するアプローチであると考えた。これまで目に見えず、認識されることもなかった感情は、流れ続ける時間の中でも絶えず精神を通し私の身体を巡り続けてきた。そして私が表現という手段を身につけた瞬間、身体から溢れ出し、形を持ったのである。この形こそが感情の源であり、私の中に確かに存在する「精神」を形にしたものである。私は感情に耳を傾けることで源である「精神」を作品に落とし込み、対話を行うことが可能になるのではないだろうか。

また震災に触れた制作を行うにあたり、過去の自身と目を合わせて対話を行う必要があると考えた。一度は思い出すことに恐怖を覚え、蓋を閉じた出来事である。作品制作を行う際に震災当時の出来事全てを曝け出す必要があるのか、感情をどの様に表現すべきかなど、慎重に過去の私と対話を行わなくてはいけない。そのためにも、震災当時に私が抱えていた感情に焦点を当て、私が感情を作品に落とし込むための表現方法を模索する必要がある。私は自己の内面を認め、精神と対話を行う為の手掛かりとして欠かせないものを、過去の経験から読み取り作品に起こすことを試みた。

3.素材についての考察

私はこれまで「蠟」と「繊維」の2つを主軸に制作を行ってきた。

○蠟 修士1年次以降、私は蠟を主素材に制作を行ってきた。震災当時の私は家族が其々に己の立ち位置を見つけ、誰かの支えとなりながら前進していく姿を見るうちに、唯一存在意義を見つけない自身に不安を抱いていた。しかしこの不安感も停電の中、消費されていく蠟燭を再形成するという自身に課せられた役割を獲得することにより、表現の消化へと繋がった。時間経過の中で風化していく記憶とは違い、蠟は、直接過去の情景を追体験できる素材となっている。それは、記憶を思い起こすきっかけとなるだけでなく、過去と現在を繋ぎ合わせる制作するうえで重要な要素になると考察を行った。

○繊維 学部4年次卒業制作以降、繊維を素材に使用した制作を行ってきた。「縁」をテーマに制作を行うにあたり、視覚化できない存在に形を持たせるべく「袖振り合うは多生の縁」や「運命の赤い糸」など言葉遊びの中から縁と関わりをもつ「繊維」に着目し、糸を素材に表現を試みてきた。また、血や血縁といった表現を大切にしたいと考え、赤い糸を使用してきた。私は、皮膚越しに見える血管が青いことに不安感を抱くことがある。自身の身体から溢れ出せば赤いはずの血が、異なった色で視認できている様が生きているという感覚を鈍らせるためである。血の色は赤、という考え方から赤い糸を選択することは直接的な表現になってしまう恐れがある。しかし、この色だからこそ私は生きているということを強く実感できるのだと考察した。

4.作品造形の考察

4-1 枝について

精神は絶えず、感情を身体に流し続ける。その流れに耐えきれなくなった時、私は感情の源である精神に蓋をし、自身から切り離してきた。私はこの切り捨てられた精神の形が、雨風に揺さぶられ、地面に落ちた枝と類似して見えるようになった。

モチーフ検討当時は台風が直撃した時期であった。雨風過ぎた森を散策していると、大量の枝が地面に散乱していた。しかし、切り落とされたものは、その段階で無に還る訳ではない。その中でも懸命に生きようと「何か」が蠢いている。私はその「何か」が事実ごと目を背けてきた過去の私に類似して見えたことから「枝」をモチーフに表現を試みた。

4-2 壁面作品について

「いつか一人になる私へ」は過去に制作した作品2点の再考作品である。1作目では、家族の形を蟻の巣に見立て、客観的に縁を観察するという表現を試みた。観察という思考から長方形の型を使用した造形を行い、虫籠や水槽を連想させる表現を行なった。しかし、伸びやかに広がる長方形の形に落とし込まれた縁はどこか自由に、絡まったまま見失ってしまうような印象を受けた。

2作目からは、一辺が均等な正方形に型を変更することで、形から受ける印象の変化を試

みた。長方形とは異なり、形から見える動きを極端に減らしたことで、より一層縁に集中できるような表現が行えたように感じる。

5.修了作品について

修了作品 「そこで私は息をした」

私を構成するものは私であり、一度切り捨てた自身を導く者も私自身である。

修了作品「そこで私は息をした」では、蠟と赤い糸のみを使用する表現を行った。蠟は過去と現在の私を繋ぐ感情であり、精神と向き合った時間である。そして、その中に流れるものは忘れられることを恐れ、懸命に生きようともがく過去の私だ。本作品では、過去があつて今の私が存在することを、自身が目指す空間への意識を存分に表現できるよう試みた。

本作品を制作するにあたり、枝を採取する際あえて骨のように見える枝から型取りを行なった。

生き物の骨というものは、私の中では死を連想させる。また、強風の中で母体から切り離され、散らばった枝も一種、死を連想させる光景であった。しかし、それぞれは生から断絶されたからといって、無に還る訳ではない。肉体的生はなくなれど、その中には思いや、記憶、もしくは別な命が巣食ったりと、精神的な繋がりが感じられるのである。私は、私からこぼれ落ちたものの生命力を表現するべく、人間の一部分である骨、生命を感じさせた枝、どちらとも捉えることができる表現を目指した。

私の精神に流れる感情は切り離されてもなお息をし続け、作品制作をもって私の一部になろうと集約されていく。この状態を表現するために、蠟から飛び出したいくつもの糸が複雑に絡まり合い、一本の柱となるような造形を試みた。この一本の柱こそが私自身であり、対話を行おうと思考し続けた精神の形なのだろう。母体から切り離された枝の中に生き物が息づくように、私から切り離された記憶の中でも過去の私は力強く息をし続けていた。私が空間に落とし込めたものは、私が過去と向き合った時間であり、その中で力強く息づいていた私自身なのである。

作品名「いつか一人になる私へ」

震災は等しく、恐怖と混乱の感情を人々に与え、柔らかく脆い膜を剥がしていった。私の家族も例外ではない。母は母として振る舞えず、はじめて私の前に一人の人間として現れた。それぞれが当たり前のように暮らしてきた家族内での役割が震災を機に剥がれ落ちてしまった瞬間である。

本作品は、型の中に蠟を流し、赤い糸を落とし込む行程を何層も行うことで表現されている。この蠟によって積層されたものは、私がこれまで家族と向き合いたいと願っていた時間である。その中に落とされた赤い糸は、震災を機に複雑に絡み合った縁の中から導き出した、私が願う家族との縁の形である。

また本作品は、自身にいずれ訪れるひとりになる瞬間への心構えでもある。

いつか、家族がいなくなった時間の中で、思い出として残るものは何だろうか。それは、家族にひかれた手であり、抱きかかえられた身体であり、共に過ごしてきた時間の全てなのだろう。これは追い求める縁の形であり、家族の家族でありたいという私の願いを表現できるよう、思考した作品である。

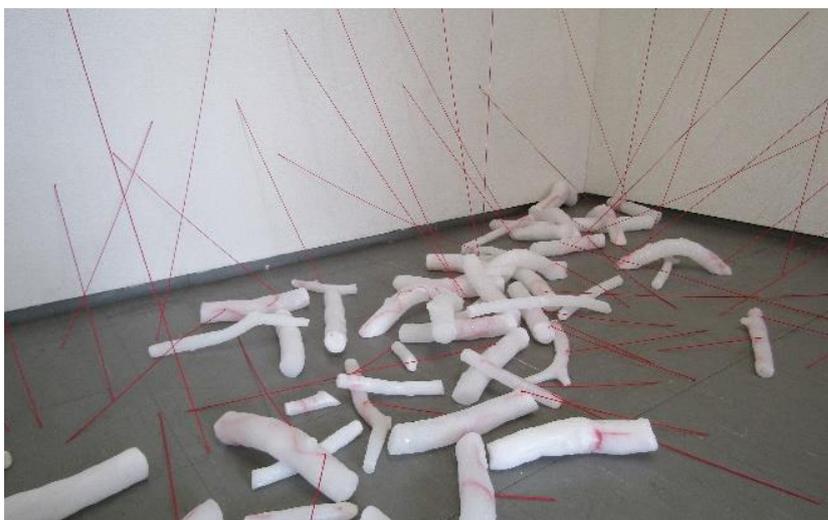
6.おわりに

本研究を通し、自身の作品が目指すもの、現段階で目標に及ばない点について考察を行ってきた。修士2年間で行ってきた制作は、言葉にできない、未知の存在である「精神」に、形を与えることで対話を試みるものであった。これまで自己の内面で蠢き、感情を絶え間なく流し続けた精神である。作品にすることで私の内面から距離を取り、客観的視点を持って対話を行う必要が私にはあったのだ。それは今後の制作の為でもあり、捨て去ってしまった私が私であると再認識するための制作である。

しかし、これまで目を背けてきた自身の過去である。対話を行い表現するにも、本当に知りたいこと、伝えたいことは「何か」、見つけ出すことが困難だったようにも感じる。私は、この「何か」を知りたいと考え、表現を行ってきた。

本論では、自己の感情がどの様にして作品という形に落とし込まれていくのか分析を行うことができた。だが、この分析もまた自身が続けていく制作の途中でしかないのだろう。事実、作品造形は修士2年の間で変容し続けてきた。今後も私は精神と向き合う中で形を導き出し、作品をもって未だ見ぬ自己との対話を実現できるよう考察を続けていきたい。

2019-2020 制作作品



2019「慈切しふたたび息をする」



2020 「この生涯でゆいいつの」



2020 「そして、何度でも」